

これは、神戸新聞の令和2年11月7日の記事です。

実はこの『寄贈オルガン』は、4年前に広田康爾さんのお母さんが使用されていたオルガンです。お家の中に眠っていたオルガンは、約100年前の物で貴重品、処分はもったいないと言って加西市教委の方に寄贈されたものです。

オルガンが復元して、令和2年11月8日の「俘虜収容所音楽会 青野ヶ原楽団帰国報告コンサート」でお披露目されることになっています。

《大正末のオルガン再び 寄贈の品、加西市教委が修復》



大正末期～昭和初期に造られ、寄贈されたオルガンを兵庫県加西市教育委員会が修復し、同市青野原町の同町公会堂前で8日午後1時半から開かれる青野原楽団の帰国報告コンサートで披露する。

昨年、同町にあった青野原俘虜(ふりよ)収容所の資料展示会がオーストリアで開かれており、同楽団も同行していた。(小日向務)

修復されたオルガン
加西市上宮木町 南部公民館

同収容所は第1次世界大戦中の1915～20年に設置され、オーストリア・ハンガリー帝国の捕虜らが暮らしていた。捕虜たちが演奏会を開いていたことから、研究者や音楽家らでつくる実行委員会が展示会を企画、同楽団が派遣された。

一方、オルガンは2016年に、同市の廣田昌子さんが市に寄贈。加東市の調律師加門龍成さん(59)が修復した。ヤマハの前身、日本楽器製造の製品で、日本でも初期に造られたオルガンという。

足踏みペダルで空気を送って音を出すのが、空気漏れのほか、鍵盤や鍵盤の下に敷かれたフェルトなど内部の多くが傷んでおり、加門さんは「交換部品を入手するのに苦労した」と話す。

楽団は弦楽五重奏とピアノ、オルガンの編成。当日はシューベルトの軍隊行進曲など現地で披露した曲を中心に演奏する。当日受け付けで、先着60人。無料。
同市教委埋蔵文化財室 TEL0790・42・4401

同公会堂横の倉庫では、収容所での食と生活に関する写真約50枚を展示。最終日の15日午後1時半からは、同公会堂前で、神戸大学の天津留厚名誉教授によるオーストリア青野原収容所展の報告がある。いずれも無料で当日受け付け。

各行事は同実行委や「ももこの11」(富合地区ふるさと創造会議)が協力して開く。